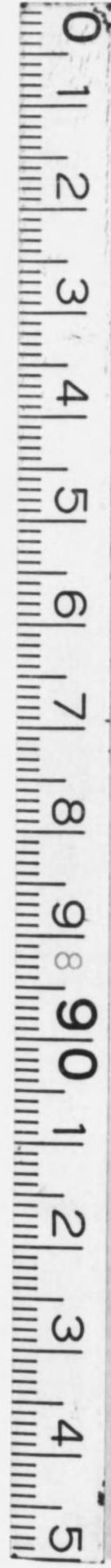


特 241

/33

岡倉天心先生略傳



始



特241  
133



天 心 先 生 小 照

## 岡倉天心先生略傳

先生姓は岡倉、幼名を角藏と呼び、後覺三と改む。好むで天心と號せられしが、中年比には混沌子と稱し、晩年碧籠の別號をも用ひられたり。蓋し天心は混沌子以後の稱號にして、先生の胸間に贅肉を生じ、随ふて截れば随ふて生じ、瘻痕相連りて宛も草體の天字をなせるより、遂に此號を得るに及べりといふ。

岡倉家は越前福井の藩士にして、代々松平家に仕へ、先生の父勘右衛門氏（一に善右衛門といふ）は才幹ありしを以て夙に春嶽公に登庸せらる。母を野畑氏といふ。先考幕府世運の開展に鑑みて、對外貿易の必要に着眼し、率先士籍を脱して居を横濱に移し、商舖を本町一丁目に開きて、生絲貿易に従事せり。かくて文久二年十二月二十六日を以て先生始めて生る。其産室は住地の一角なる土藏内に充てられしが故に角藏

と命名されしと云ふ。先生幼年の時早く生母に訣かれ、其の後保姆おつねの手に養育せらる。おつねは橋本左内を知ること深く、左内刑戮の日親しく遺骸を小塚原に弔へることあり。先生おつねに懐くこと生母の如く、寢物語にも左内の事蹟を聞されしを以て終生おつねを忘れざりしと共に、また左内を景慕すること尋常ならざるものありき。

先生較長するに及び、横濱居留地在住の米人ジョンバラー氏の塾に入りて英語を學ぶ。先生の家には商業上の關係より外國人の出入する者多く、英語は襤褸の中より其耳に熟せるのみならず、語學に於ける天稟の才能は、今や師を得ると共に著しき進歩を示し、後年これを基礎として雄飛せる素養こゝに成れりと云ふ。先考繼室を迎ふるに當り、先生出でて神奈川在の長延寺に假寓し、獨居専ら漢學を研修す。寺は先妣の墳墓のある所なれば、日夕思慕の情を寄せつゝ、孤獨の境に安んぜられたり。

明治六年故ありて先考横濱の商舖を閉ぢ、家族を擧げて東京に出で、蠣殻町に旅宿

を業とす。時に先生十二歳なり。越えて八年十四歳にして東京開成學校に入學し、其寄宿生となられしが、翌年其傍ら南畫を學ばむが爲め、奥原晴湖女史の門に入り、一時其御徒町の塾に止宿せられしことあり、これ實に先生が日本畫に親める端緒なりとす。十年四月東京開成學校の組織一變し、東京醫學校と合して東京大學となるや、先生其の文學部に屬することとなり、政治學理財學を專攻す。是より先き狩野友信翁は開成學校の前身開成所以來引續き圖書科の教諭として、川上冬崖氏を助けて洋畫を擔任しむれば、先生も當時其指導を受けられたるならむ。十一年米人フェノロス氏渡來し、次で英人ホートン氏來り共に文學部の教壇に立つて其蘊蓄を傾倒す。フ氏はヘーゲル一派の理想的哲學を高唱し、東洋哲學殊に佛教に興味を有し、兼て美學を得意とす。ホ氏は中世紀の英文學に堪能なるを以て知らる。此等の講義には先生喜びて出席し、專修科目よりも寧ろ多大の興味を之に寄するに至れり。フ氏東洋美術研究に従事するに及び、先生有賀長雄氏と相前後して、氏の爲めに文献の搜索並に翻譯の

勞をとり、其間に藝術的知識の涵養に資せられしもの甚だ多しとす。然れども先生晩年の述懐に徴すれば、ホ氏の文學趣味に負ふ所また尠からざりしを知るに足る。翌十二年大岡氏を娶りて夫人とす。夫人名は基子、慶應二年に生る、先生歿後は塋域を守つて五浦に餘生を送り大正十三年に永眠す。

明治十三年先生十九歳を以て東京大學を卒業し、十月文部省御用掛となり、音樂取調掛を命ぜらる。當時伊澤修二氏主として其の事務を管掌し、米人メーソン氏また其事に關與せしを以て、先生兩者の間に立ち、調査と通譯とを並び行はる。先生天性音律に明かにして最も之を嗜み、後年歐洲に出遊し、米人ビゲロー氏と共に初めてワグネル樂を聽ける時、感興禁じ難く、會心の極、時に覺えず指頭ビ氏の肩を打つ毎に、必ず肯綮に中れりとは、音樂通を以て聞えたるビ氏の嗟嘆して語れる所なり。されば音樂取調掛としての先生は、當時適材適所を得たる者として、頗る將來を囑望せられしが、奔放不羈なる先生の性情と、伊澤氏の嚴格主義とは相容れず、翌十四年其本職を

兼務として、専門學務局の勤務となり、越えて十五年其兼務をも解かれて、改めて内記課兼務を命ぜらる。これより先生全く意を音樂界に絶ちて他の美術界に活動の天地を求めんとせられし如し。後年美術學校長たりし時、文部大臣井上毅氏より音樂學校長の兼攝を慫慂されしことありしが、先生若し市川團十郎を以て教授とするを許されんか、敢て其任を辞せざるなりと對へられしかば、追の井上氏も疑懼して已みしといふ。

内記課員となりてより、時の文部少輔九鬼隆一氏の知遇を蒙り、十七年六月京阪地方への出張は、特に同氏の旨を承けて古美術に關する事項の調査に従事せられしが如し。歸京後七月文部省普通専門兩學務局に於て圖書教育調査委員を設け、先生また其委員を命ぜらる。調査の目的は、主として圖書教育上、毛筆書採用の是非を査定するにありしが、調査の進行するに従ひ、圖書教育の根本的方針を決定すべき必要に迫られ、十八年十一月新に圖書取調掛を學務一局に設けて之を考究することゝなれり。當

時先生の主義は、圖書教育を根本的に樹立して、多年沈滞せる繪畫界の風氣を一新するにあり、河瀬秀治氏等の鑑畫會員もまた佐野常民伯の主宰する龍池會の保守的傾向と遠ざかりて、自ら先生の主張に接近し來り、朝野を通じて漸く繪畫界革新の機運に向ひしが爲め、事のこゝに及べるなり。圖書取調掛は其後總務局に移され、漸次美術學校設立の基礎を固むるに至れり。

明治十九年七月、豫て本邦美術品保存の件に關し、文部省と宮内省との間に商議する所ありしが、機熟せしにや、此時先生社寺所藏の美術品を檢閲し、其保存に適當なる處置を爲すべき用命を帯びて、京都大阪當時奈良縣未だ獨立せず大阪府の管にあり滋賀和歌山の二府兩縣へ出張せらる。九月には文部大臣森有禮氏の意見に依りて、歐洲在留の文部省參事官濱尾新氏遙に美術取調委員長を命ぜられ、先生及びフエノロスサ氏新に取調委員となり、歐洲諸國に派遣せらる。一行三名は佛伊西獨奧英等の諸國を巡歴し、其間或は共に或は單獨に行動して、美術に關する諸般の研究調査を遂げ、明くる二十年十月歸

朝す。此月四日勅令第五十一號を以て東京美術學校設置の件を發布せらる。越えて十四日濱尾氏専門學務局長を以て新立學校長事務取扱を命ぜられ、先生は幹事、フエノロスサ氏は講師兼幹事として各學校設立の準備を整ふ。時に假事務所を小石川帝國大學附屬植物園内に置けり。蓋し濱尾氏一行が外遊調査の結果、本邦の美術教育は、本邦固有の美術を基礎として施行せらるべきものなりとの方針確定したるを以て、圖書取調掛の職務は、美術教育實施の専門學校と發展するに至れるなり。これと同時に純正美術と工藝教育との連絡、其の他博物館の建設、古美術品の保存法等、皆本邦固有の藝術獎勵の趣旨の下に調査計畫せられたりといふ。二十一年十月に至りて東京美術學校規則制定せられ、同十二月十日上野公園内なる教育博物館跡に校舍新築せらる。即ち現在の場所これなり。初め濱尾氏等美術取調委員の一行歐洲巡歴中、伊太利羅馬にて佛國の設立せる美術學校の特に形勝の地を占むるに鑑み、我國に於ける美術教育の好適地として上野公園の一廓を選定し、在來の教育博物館を他に移轉せしめて、新

校舎を建設するに至れるなり。

是より先き此年三月内國博覽會の開設に際し、先生選ばれて其審査官となる。四月濱尾専門學務局長と相携へて、京都大阪奈良和歌山滋賀の二府三縣に出張し、美術に關する物品を調査する所あり。九月臨時全國寶物取調掛の設置せらるゝや、先生また其掛員となり、翌月帝國博物館學藝委員となる。皆これ外遊中調査せる事項の漸次實行の緒につく所以に非ざるは無し。

東京美術學校の授業を開始せしは、實に明治二十二年二月一日にして、開校準備中先生の最も苦心努力せられしは、教授選擇の問題なりき。當時因習の久しき藝術家の社會的地位甚だ低く、従ふて自己尊重の念に乏しく、動もすれば職工視せられ、藝人扱ひされて自他共に怪まざる状態なれば、新に教授として社會的にも向上の地位を與へんには、先づ其藝術に對する自覺の精神を喚起し、従ふて其人格を昂めしむるの必要あるを感じ、數次知名の藝術家と會見の機を求め、親しく接近して其人を知ると共

に談笑の裡にこれを啓發せんことを努められたり。又學生に對しても師弟間に隔意無からしめんことを期し、研究會を起して時々校内外の有志を自宅に會合せしめ、學年始、若くは祝祭日には大鍋に薩摩汁を煮立て、四斗樽の鏡板を打抜き、一同啖合ひて冷酒の盃を舉げつゝ、打寛きて樂むを例とせられたり。春秋二回の修學旅行にも好むで山川の間を跋涉し、丸太を枕として露宿するが如き、また辛苦を共にして剛健の氣風を養成せんと努められたるなり。

二十二年五月帝國博物館理事を兼務し、美術部長を命ぜらる。六月二十七日濱尾氏に代りて東京美術學校長心得となり、尋で十月七日校長に任ぜらる。かくて銳意美術教育に盡瘁せらるゝの傍ら社會的に美術思想の養成を企畫し、茲に國華の創刊を見るに至れり。先生素より文筆を嗜み、明治十四五年の交、小山正太郎氏が東洋學藝雜誌に「書は美術に非ず」の論を掲げしとき、直に反駁文を草して同誌に寄せられ、又十九年前後には、大内青巒氏の主宰せる大日本美術新報紙上に於て、鐵槌生の名を以て

盛に健筆を揮ひ、獨立不羈の意見を發表して、大に斯界の耳目を聳動せしめられたることあり。國華の出づるに及び、先生平素の蘊蓄と抱負とを披瀝し、其絢爛なる詞藻は、鮮麗なる挿畫と相俟つて、當時の美術界に雄視し、美術思想の興起に資するもの甚だ多かりき。而して其經營より印刷校正に至るまで、先生好むで其事に當られたり。

美術學校創設の際は、先生教授の職を兼務し、主としてフェノロスサ氏講義の通譯に従事せられしが、其後自ら美學及美術史の教授を擔任し、獨得の識見と豊富の思想とを以て、和漢洋の藝術を縦横に論議されたり。其校務に熱心なる嘗て眼疾の爲に纏帶せるまゝ親しく代議士等と直接交渉を重ねて、他の官立學校よりは遙に有利なる豫算を成立せしめられたることあり。

明治二十四年九月、日本青年繪畫協會創立し、先生推されて其會頭となる。同會は其名の如く新進作家の團結にして、其後二十九年に日本繪畫協會と改名し、三十一年

には日本美術院と合體して、明治時代に於ける畫壇の中堅たりしものなり。此年政府は北米シカゴ博覽會に賛同の意を表し、臨時博覽會事務局を設置す。十二月先生其評議員に選ばれ、翌年五月更に鑑査官を兼ね。先生乃ち當局に建議し、我が出品に對して美術と工藝との差別撤廢を主張せられ、又政府出品に係る鳳凰殿の爲に英文解説を執筆せらる。有名なる隅田川流觴の宴は、當時博覽會の用務を帯びて來朝せるガワード氏―或云ガールド氏―の爲に其遠來の勞を謝し、國際の友誼を篤うせんと欲して、此舉に出でられたるなり。

明治二十六年七月十一日、先生支那出張の命を承けて發程せられ、其年十二月七日を以て歸朝せらる。支那漫遊は豫ての志望なりしが、其宿願を果されたる歡喜の情如何なりしぞ。此行先づ北京に到り、次で河南省に入り、洛陽の遺蹟を弔ひつゝ、陝西省西安に着し、長安の故址に唐代の文化を偲び、更に西して四川省に進み、成都に諸葛武侯の墓を展し、水路叙州に出で、大江に浮びて上海に下り、無限の感興を齎らして



上海より歸朝の途に就かれたり。先に歐洲の文化を見て今東洋文化の本源地に遊び、其東洋藝術に對する獨創の識見は、更に一頭地を擡んずるものありしなるべし。歸來所見の講演を請ふもの多く、先生好むで之に應ぜられたり。思ふに先生終身東洋藝術を憧憬し、回を重ねて歐米に遊び、各地知名の學者藝術家と對談せらるゝ毎に、東洋藝術の精神を主張して一步も迂ることなく、然かも彼等をして推服せしめられたるは、固より天資の超邁に由れりといへども、また深く東西の藝術を實驗考究せられたる結果に外ならざるべし。支那旅行は此後明治三十九年、同四十四年の二回を主なるものとして、其間尙ほ短期の旅行あり、合せて數回に及ぶも、其日乗を傳へざるを以て、時期と範圍とを精確に知ること能はざるを遺憾とす。

明治二十七年五月、東京美術學校の繪畫彫刻兩科の教授法を改正して、分期教室制となし、標本を本位として研究を進むるの途を講じ、六月には「美術教育施設に付き意見」を草し、翌年十月「美術協議會設置に付き意見」を具して、孰れも當局に上申

せられ、獨り學校教育のみならず、一般美術教育の獎勵、藝術家の優遇古美術品の保存等に亘りて、周密に立案企畫せらるゝ所あり、殊に京都にも美術學校を増設して東西對峙の策を立て、また工藝教育に就いても深く考慮せられたるものあり。尙本書に收めたる「美術教育施設の方案」は明治三十年松方内閣の時、議會説明の用に供せんが爲め、内命を承けて執筆せられしものにして、また前記の趣意に基きて立案されたるものなり。

古美術品の保存に就きては、明治二十九年五月古社寺保存會委員の設置せらるゝと共に其委員を命ぜられ、會長九鬼男爵の意を承けて主として保存法制定の議に與かり、社寺局提出の原案に依りて數次の討議を重ね、由緒來歴等の形式に拘束さるゝの議を排して、寧ろ歴史的藝術的に其價值を認むべしとの内容尊重を主張せられたりといふ。かくして出來上れる者は即ち現行古社寺保存法これなり。

是より先き二十九年三月、帝室技藝員選擇委員を命ぜられ、翌四月青年繪畫協會の

日本繪畫協會と改名するや、推されて其副會頭となる。會頭は即ち公爵二條基弘氏にして、先生は専ら實務の衝に當られたり。當時先生日本畫の意義を極めて廣汎に解釋すべきものとし、本邦在來の各畫派は勿論、油畫の如きも邦人の手に成れるものは、當然日本畫として取扱ふべしとの意見を以て、此年九月に開かれたる同會第一回共進會には三部制をとり、第一部は本邦在來の様式に依れるもの、第二部は泰西の様式に則とれるもの、第三部は全然新機軸を出せるものとして、所謂白馬會の洋畫を第二部に收むることとなれり。東京美術學校の繪畫科に洋畫を増設し、新に圖案科を置かれしも此年七月のことなりき。十一月臨時博覽會評議員を仰付られ、一千九百年開設の巴里博覽會に對する準備に着手せらる。此時先生大隈伯等と共に朝野の間を奔走して大に資金の勧誘に努め、製作家の出品に補助金を與へて其出品を奨勵せらる。明年三月博覽會出品に關する事項調査を囑託され、出品項目中に本邦木彫の一項を追加せしめられ、又政府出品たるべき日本美術略史の編纂委員をも務められたることあり。

此年先生の父勘右衛門氏病を以て逝去せらる。

明治三十一年は先生の生涯を通じて、一新時期を劃せり。此年三月二十二日故ありて帝國博物館理事を罷め、尋で二十九日東京美術學校長兼教授の本職もまた非職を命ぜらる。先生時に三十七歳。これより其境遇は全く自由となり、引續き古社寺保存の計畫に參與し、或は其用務を帯びて旅行せらるる外は、殆ど公的生活と絶縁して、其好む所に向つて活動の天地を求められたり。先生の美術學校を退かるゝや、橋本雅邦横山大觀、下村觀山、菱田春草等の諸教授また袂を連ねて其職を去り、同志茲に糾合して日本美術院を創設することとなり、七月一日創立趣意書を發表し、假事務所を湯島天神町に置けり。八月一日谷中初音町の地に就きて南北兩館の建築に着手し、十月十五日工事落成して開院式を擧ぐ。雅邦氏其主幹となり、先生推されて評議員長となる。時に日本繪畫協會の事務また院に委託され、院は美術並に諸工藝の研究と製作とに従事し。併せて社寺國寶の委託修理をも爲す所となれり。院の事業として最も美術

界に貢献せるは、毎年秋季に催せる展覽會にして、先生の苦心と雅邦大觀觀山諸氏の努力とに依り、每會手法着想に嶄新なるもの多く出品せられ、明治畫壇の開發に資せしこと甚だ大なりとす。

明治三十四年十一月二十一日初めて印度漫遊の途に上らる。印度巡歴中其國人に對する同情と、特にタゴール氏等との親交は、時の總督カーゾン卿の忌憚する所となり、終に道を轉じて歐洲に向ひ、翌年十月三日を以て歸朝せらる。

「ゼ、アイデアルス、オフ、ゼ、イースト」は此旅行中の感想よりして起稿せられたりといふ。

明治三十六年常陸國五浦の地を購ふて其居室を構へらる。其地高崇海波眼下に去來し、青松窓楯に嘯き頗る先生の意を得たりしを以て、家を舉げて此處に移り、自ら五浦釣徒と號し、閑あれば小艇を浮べて釣魚に耽けられたり。其技も磯近く小鱗を獲るに満足せず、遠く沖釣を試みて大鱗を上げ、漁夫をして舌を捲かしむるものありき。

此年秋令嬢高麗子を米山辰夫氏に配せらる。「ゼ、アイデアル、オン、ゼ、イースト」倫敦より出版されたるも、また本年にして、これ先生が英文の著書としての處女作なり。

先生豫て計畫せられしもの、機熟せしにや、明治三十七年二月十日伊豫丸に便船して米國に出立せらる。時に日露間の國交既に斷絶して、戰雲將に漲らんとし、これ或は邦船の最終外國航海かと危ぶまれたりき。其三月二日紐育に着し、同二十四日ボストン市に入り、五月下旬更に紐育に引返し、尋で又ボストン市に還り、ボストン美術館の顧問として同地に滯留せられ、同館所藏の豊富なる東洋藝術品に就きて、其目錄の調製及取扱法保存法等の議に主として參與せられたり。其間「ゼ、アウエークニン、グ、オフ、ジャパン」を執筆して公刊せられ、又聖路易世界博覽會の學術講演會に臨みて、「繪畫に關する最近の問題」を論述せられ、其獨特の識見と巧妙なる英語とは、益外人の驚嘆する所となれり。此講演は其翌年「日本の見地より見たる近世藝術」の

名を以て、「インターナショナル、クオタリー」誌に掲載せらる。

一八

明治三十八年三月二十六日米國より歸朝せらる。此時より先生引續きポストン美術館に關係を有せられ、初めは半年毎に、後には一年毎に彼地に赴き館務に従事せらるゝことゝなれり。歸朝後五浦の別荘を増築して其永住地と定めらる。夏時疾に罹り田代病院に入院して治療せられしが、快癒後十月六日再び渡米の途に上られたり。

明治三十九年春米國より歸着の後、かねて購ひ置かれたる越後赤倉の山莊に赴きて温泉に暑熱を避け、秋季に入りて再び支那に漫遊せらる。此行其詳細を知ること能はず、歸來唯北京白雲觀の道士と清談を交へしが、最も興趣ありしと語られき。十一月東京なる日本美術院を擧げて五浦に移さる。これより先き此夏同院規程を改定して、雅邦氏に代りて先生其主幹となられ、而して先生既に五浦を常住地とせられしを以て院もまた従うて移るに至れるなり。此に於て横山下村菱田木村の諸氏も亦五浦に移居して、繪畫の研究製作に従事することゝなり、院の面目全く一變せり。此年紐育より

「ゼ、ブック、オフ、テイ」出版せらる。本書は先生の著書中最も名聲を博したるものにして、米國にて之を教科書に採用せる學校あるのみならず、獨逸語にも佛蘭西語にも翻譯せられて、廣く世界の各國民に愛讀さるゝに至れり。未だ上梓を見ざるも歌劇白狐は、特にポストン市の有名なるガートナー夫人に贈呈せむ爲め、三十八九年かけての滯米中に初稿を起されしと聞く。

明治四十年八月中旬、赤倉山莊の普請略成れり。九月一日國畫玉成會の成立と共に先生推されて其會長となり、傍ら日本木彫會をも指導せらる。十月文部省第一回美術審査委員會委員を命ぜられ、其用務を了へて後、十一月十六日第三回の米國行あり。翌四十一年春米國よりの歸途歐洲を巡遊して歸朝せらる。其間雅邦氏は一月十三日を以て病歿せらる。六月ポストン美術館より本國政府を經由して、先生の功勞に對する感謝狀を我が政府に寄せ來れり。九月二日フェノロスサ氏倫敦に於て客死の訃報あり。冬第四回の渡米行あり、十二月七日ポストン美術館に到着せらる。

一九

明治四十二年歸朝後は、翌一千九百十年開設の日英博覽會に政府出品たるべき特別保護建造物及國寶帖編纂者の一人として其任に當られ、主として英文解説の勞をとられたり。明くる四十三年四月十九日東京帝國大學講師を囑託され、文科學生の爲に泰東巧藝史を開講せらる。秋九月第五回の渡米行あり、越えて四十四年一月米國より歐洲に渡航し、倫敦巴里を歴遊して、二三月の交ボストン市に還り、同地滞在の上、八月二十六日歸國の途に就かる。滯米中ハーヴァート大學より「マスター、オフ、アーツ」の學位を授與せらる。授與式の時同大學長ローウェル氏の推賛の辭に

*“Okakura Kakuzō, unrivalled adept in the mystery of Oriental art, hospitable to what western lands can give, but determined to maintain as a priceless heirloom the native genius of Japan.”*

といへるは、蓋し先生も首肯せられたるならむ。歸朝後また支那の短期の旅行を試みられしが、歸來健康例ならず、年末頃には其症候稍著しきものありき。

大正元年八月第六回の渡米行に上らる。先づ印度に赴き、尋でボストン美術館に著し、例の如く館務に執掌せられしかど、病症次第に進むが如く、頗る心身の疲勞を感ぜられしかば、終に意を決して翌年四月歸朝せられたり。これ實に先生が最後の米國訪問なりき。先生の彼地に在るや、獨り美術館の職務に盡瘁せられしのみならず、筆に口に東洋文化殊に日本文化の價值を唱道し、これを館の所藏品に照して切實に證明せられ、一は館の地位を昂め、一は眞に日本文化を理解せしめて、日米間の國交に不易の楔子を打込まむと努められたり。然して人皆喜んで其文を讀み其説を聽かむと欲し、館の内外を通して先生の名聲甚だ重きをなすに至れり。是を以て初めは單に館の顧問たるに過ぎざりしが、後には委するに支那及日本部の部長を以てせられ、先生愛煙の癖甚だしきを見ては、禁煙の席上、尙且つ喫煙の自由を默許し、先生椅子を好まれざるを以て、別に座席を設けて其便を計るなど、館の先生に對する優遇また尋常ならざるものありき。嘗てハーヴァード大學より重俸を以て先生を教授に聘せむとせ

しことありしが、館また同等のものを提供して先生を引留めたり。先生が美術館の館報に載せられたる論文は

“Japanese and Chinese Paintings in the Museum.”

Bulletin Vol. II, No. 1, January, 1905.

“Recent Acquisitions of the Chinese and Japanese Department.”

Bulletin Vol. IV, No. 18, February 1906.

“Sculpture in the New Japanese Cabinet.”

“Catalogue of Objects in the New Japanese Cabinet.”

Bulletin Vol. IV, No. 19, April 1906.

“Exhibition of Recent Acquisitions in Chinese and Japanese Art.”

Bulletin Vol. X, No. 60. December 1912.

の五篇にして、別に館員のカーショウ氏と連名の

“Chinese and Japanese Mirrors.”

Bulletin Vol. VI, No. 32, April 1908.

の一篇あり、又コンファレンスの講演として

— The Nature and Value of Eastern Connoisseurship.

April 6, 1911.

Religions in East Asiatic Art.

April 13, 1911.

Nature in East Asiatic Art.

May 4, 1911.

の三篇を傳ふ。

先生大正二年四月歸朝後暫く五浦に滞留して静養せられ、日頃衰弱の病源として十二指腸虫を驅除せられしが、次で東京に出で八月古社寺保存會に出席し、同二日の本

會議に於て、法隆寺壁畫保存法の急務なるを力説し、特に其の調査機關設置の件に關する建議案を提出せられたり。これ實に先生が古美術保存の爲に放たれたる最後の聲なりき。此日先生病を推して出席し、然かも建議案の成立に努められしを以て、病勢遽に昂進し、其席に堪へずして本郷の橋居に歸らるゝや、症狀容易ならざるものありき。數日を経て田端の自宅に赴かれ、治療に手を盡されしかど、病勢依然として衰へず、頗る重態の徴を示せり。十六日東都の暑熱を避けんとて、強て越後の赤倉山莊に轉地されしが、病勢日に進みて、終に九月二日午前七時を以て永眠せらる。宿痾の慢性腎臟炎より尿毒症を併發して此に至れるなり。享年五十有二。特旨を以て從四位勳五等を加叙せられ、雙光旭日章を賜はり、祭料金三百圓を下賜せらる。九月三日遺骸を東京に移し四日喪を發し、五日葬儀を谷中に執行す。茶毘の遺骨は染井に葬り、其分骨を五浦に埋む。先生夙に三井寺の櫻井敬徳阿闍梨に就きて三歸戒を授かり、雪信の法號ありしかど、其家淨土眞宗なるに因み、平生の稱號を併せとりて、釋天心といふ。

諡す。嫡男一雄其後を繼ぎ、残れる夫人は五浦に住みて墓側に餘生を送らる。

此年十一月十五日東京美術學校に於て先生の爲に盛大なる追悼會營まる。ポストン市に於てもまた十月二十日ガードナー夫人主催となりて、佛式の哀悼會行はれたりといふ。

大正三年九月、横山大觀下村觀山等諸氏先生の遺志を繼承して日本美術院を東京谷中上三崎南町に再興し、構内に天心靈社を祀り、先生の靈を勸請す。

昭和六年、正木東京美術學校長及大觀氏等發起して、先生の銅像を美術學校々庭に建て、六角堂を作りて之を安置し、十二月六日除幕式を擧ぐ、銅像原型は平櫛田中氏の作る所とす。

今先生の本傳を終るに臨み、先生が最も敬慕せられ、又最も先生を知悉せられたる濱尾男爵の前記追悼會に於ける追悼の辞を載せて、再び先生の靈に手向けむとす。

本日茲に故岡倉覺三君の追悼會を開かるゝに際し其生前の事蹟を回想して轉々追懷

の情に禁へず

本年九月四日不幸にして此優越有爲なる審美學者美術の指導者を喪ひたるは洵に痛惜に堪へざるなり

君は東京大學出身の俊才にして刻苦研鑽其前身に屬する開成學校に於て高等普通學科を豫修し進みて同大學の文學部に入り政治學理財學を専修し明治十三年其業を卒へり在學中英文學哲學を兼修し殊に英文學審美學の趣味深く英文章を善くし嶄然頭角を顯はされたり

當時同文學部の政治學理財學哲學擔任のフェノロサ氏あり其關係淺からず同氏は明治十一年米國より來朝以來夙に日本美術の精妙なるに着眼し卓拔なる審美識見を以て之が研究に従事し其固有の特長を指摘唱道して内外人をして覺醒せしむる所あり多年在留銳意美術の事業に努力し其復興發展に偉功ある知名の審美學者美術の指導者一大批評家たりき

乃ち故岡倉は文學部卒業の前後より此フェノロサ氏と共に日本美術の研究に従事し或は社寺の古名作品に就き或は生存の名匠作家に就き銳意調査して造詣する所あり前途美術事業を以て國家及美術界に貢獻せんとするの志を堅くするに至れり然して君は卒業後直ちに文部省に出仕し専門學務局等に屬して學務に參し美術に關する取調に従事し又特に圖書取調掛を置かるゝに際し其事務を掌り二三の名匠作家等と共に繪畫及毛筆授業法等の調査を爲し美術教育上資する所あり明治十九年官命に依り故岡倉君は故フェノロサ氏と共に美術取調委員とし當時彼地に在り教育制度の調査に従事せる一員を美術取調委員長として該諸國に於ける美術及其教育法の調査に従事し而して此一行三名は伊佛西獨塊英等に涉り或は同行し或は單行し寺院美術館等に於て繪畫彫刻等の作品を鑑査し美術學校工藝學校等に於て其教制及授業法等を査察し又美術に關する制度保存法等を調査し大に得る所ありしが故岡倉君は其宏識を以て勵精視察し特に得らるゝ所あり



明治二十年東京美術學校の創設に際し故岡倉君は専ら幹事として經營に従事し故フエノロサ氏は講師兼幹事として參劃し校長事務取扱管理の下に諸般の準備を爲し繪畫彫刻等の教科課程の調査委員の選擇等に關し君に負ふ所殊に多しとす同二十三年同學校長に任ぜられ爾後校務を總管し漸次其教程設備の擴充を圖り創設以降十箇年餘専心美術學校の事業を擔當し幾多の藝術家を誘掖し本邦美術教育の進運を扶翼したるの功績甚だ大なり

又同二十一年臨時全國寶物取調掛となり後年古社寺保存會委員となり終始其什寶の調査鑑別保存等に盡瘁して其勞績尠少にあらず

又帝國博物館の理事學藝委員となり美術品の調査整理に努力し其間支那に差遣せられ其美術の状態を視察し資する所あり

同三十一年美術學校長を罷め退職後美術院を主幹し新進の藝術家を誘掖し新作品を獎勵せり又米國ボストン博物館の招請に應じて其東洋美術部長となり爾後概ね隔年

彼地に渡行在留し同部夥多の美術品を調査し殊に日本美術品に就ては整頓宜しきを得殆んど比類なきに至らしめ或は臨時講演を爲し我美術の精妙特質を紹介し或は其間歐洲に出張し印度を視察し東西奔走して廣く美術界の爲に竭盡して止まず

又數年に涉り屢々博覽會展覽會の評議員審査員等となり盡瘁する所ありき又四年前より東京帝國大學文科大學の講師を囑託せられ隔年米國より歸還の際東洋の美術及其史要を講説することとなり大に囑望せらるゝ所あり

又米國在留中に涉り英文の大著作を爲し其ブック・オブ・テー、アイチアル・オブ・イラストの如き高評嘖々外人の賞讃する所となり君が美術に於ける識見の高尙奇抜なる英文章の巧妙特調なるは餘人の容易に企及し能はざる所あり彼我相益すること尠からざるべし君の英文は嘗て大學等に於ける素養あり爾後益々練熟して近時英文に於ても一大家と稱せらるゝに至れり抑も君が美術の感想は非凡にして天才とも謂ふべく其の美に對するや主觀的奧妙を穿ち客觀的眞美を發き能く藝術家の意匠及術技

を鑑識するが故に藝術家も其批評に感動し啓發する所あり隨て其作品の進歩を促すこと尠しとせず君の如きは又實際美術の一大批評家と稱するも不可なかるべきなり

君が畢生間心力を委したる美術事業は濶大にして美術の教育内外調査研究古名品の保存藝術家の誘掖新作品の奨励美術海外紹介英文著作等に涉り其國家及美術界に貢獻したる功績は顯著にして永く歿すべからず

圖らざりき君不幸にして當夏病を發し卒然として赤倉の別墅に斃る實に吾人をして驚嘆せしめたり君は美術事業に就き内外に涉り偉大の抱負を有し世人も亦君に期待する所多大なりしに忽焉長逝せり遺憾疆り無し洵に國家の爲美術界の爲痛惜に堪へざるなり聊か蕪辭を述べて謹みて追悼の至情を表す

大正二年十一月十五日

濱 尾 新

昭和十七年八月五日印刷  
 昭和十七年八月十五日發行  
 (定價金十五錢)  
 東京市下谷區谷中上三崎南町五二  
 日本美術院内  
 編輯兼發行人 財團法人岡倉天心偉績顯彰會  
 右代表者 齋藤 隆三  
 東京市神田區神保町二丁目十六  
 印刷 著 森 島 正 之  
 東京市神田區神保町二丁目十六  
 印刷所 秀 名 社  
 (東京三三〇三)

終

